

---

# そこにある美

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そこにある美

### 【Nコード】

N0257Z

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

武器ではなく楽器を操る英雄オルフェウス。彼が英雄と謳われる理由は何か。ギリシア神話の異色の英雄を扱った作品です。

## 第一章

そこにある美

オルフェウスは武器を使わない。豎琴を奏で歌を歌う。

その彼の音楽には誰も聞き惚れ動きを止めてしまう。彼の音楽はそうしたものだった。

だが彼は何があっても剣も槍も持たない。そのことについてだ。彼を愛する者達も怪訝な顔で問うのだった。

「何かあれば大変なことになります」

「世の中どういった人間がいるかわかりません」

「魔物もいます」

そうした剣呑な存在のことを彼に話すのだ。

「それでも武器はですか」

「持たれないのですか」

「武器は好きではありません」

これがオルフェウスの返答だった。巻いた金髪に緑の澄んだ目、顔立ちは女性的であり睫毛が長い。背はあまり高くなく身体つきも華奢だ。まさに剣なぞ持ったこともない感じである。

その彼がだ。言うのである。

「ですから」

「しかしそれではです」

「何かあればです」

「危険です」

「それでも宜しいのですか？」

「はい」

それでもだと。あくまで言う彼だった。

「それには不要のものですし」

「不要!？」

「不要ですか」

「武器が」

「はい、不要です」

また言う彼だった。

「そうしたものも必要です」

「あの、武器は己の身を守る為のものです」

「それが不要とはです」

「とてもそうは思えませんが」

「それでもですか」

「私には音楽があります」

今度は微笑んでこんなことを言うオルフェウスだった。

「ですから」

「大丈夫なのですか!?!」

「音楽で」

「豎琴と歌で」

「戦いだけではありません」

優雅な微笑みだ。まさに戦いを知らない者の微笑みだった。女性的なものさえ感じさせる微笑みでだ。彼はまた言うのだった。

「ことを収める手段は」

「そうでしょうか」

「やはり武器と思いますが」

「それでもですか」

「はい、私はそう信じています」

「こつ己を愛する者達に話すのだった。彼はあくまで武器を持つとしなかった。」

その彼がある日だ。友人の結婚式に招かれた。彼の幼い頃からの友人でありその式においてその豎琴と歌も披露して欲しいというのだ。

その話を聞いてだ。彼は笑顔で言うのだった。

「では」

「来てくれるのかい?」

「喜んで」

その優雅な微笑みで答える彼だった。

「そうさせてもらいます」

「そうか。それは有り難い」

「では。その日に」

「うん、君も楽しんでくれ」

こんな話をしてであった。彼はその結婚式に招かれた。式は街の外れでわれそこにだ。オルフェウスも赴いたのである。

席が設けられそこに葡萄の美酒や牛の肉を焼いたもの、それにパンに果物といったものが並べられている。その中央にだ。

彼の友人と美しい花嫁が着飾ってそこにいる。その彼等がオルフェウスに声をかけてきた。

「やあ、よく来てくれた」

「御待ちしていました」

こう彼に声をかけるのである。

「じゃあ。まずは御馳走に美酒を楽しんでくれ」

「遠慮なく」

「有り難うございます」

オルフェウスも彼等に笑顔で応える。

## 第二章

「ではお言葉に甘えまして」

「うん、存分にね」

「楽しんで下さい」

「そうさせてもらいます。ところで」

ここだ。オルフェウスは式の間を見回したのだった。

そのうえでだ。こう二人に尋ねた。

「お客人ですが」

「うん、そうなんだ」

友人が笑顔で彼に応える。

「ケンタウロスも呼んだよ」

「あの方々もですか」

「反対する人も多かつたけれどね」

ケンタウロスは酒好きで乱暴な種族として知られている。酒に酔っては暴れたりするのだ。だから彼等を快く思わない者も多い。

場にはだ。その腰から下が四本足の馬の彼等もいる。彼等は杯を手にして御馳走や美酒を楽しんでいる。その彼等を見てだ。

友人はオルフェウスにだ。こう話すのだった。

「僕が御願いしてね」

「そうしてですね」

「うん、あの人達にも来てもらったんだ」

「そういえば貴方は」

「昔からケンタウロスとも付き合ってきたから」

彼はケンタウロスの間にも多くの友人がいるのだ。オルフェウスをはじめとした人間の友人達ばかりではない。そうした器の人物なのだ。

だからその彼がだ。こう言うのだった。

「それでね。僕の結婚の祝いの場にね」

「いいことだね。ただ」

「うん、大丈夫だとは思うけれど」

葡萄酒の美酒を笑顔で飲んでいるケンタウロス達を見てだ。彼も言う。  
う。

「お酒がね」

「ケンタウロスの悪い癖です」

そのことはオルフェウスも彼も知っていた。それで今話すのだ。

「酒癖はどうしても」

「そうなんだよね。何もなければいいけれど」

「どんな種族にも欠点があります」

オルフェウスもケンタウロスとは付き合いがある。だから公平に  
言えた。

「思えば人もですし」

「酒癖の悪い人が多いね」

「それを考えればケンタウロスだからというのもよくありません」

「そういうことになるね」

「はい。ただ」

それでもだというのだ。

「お酒がありますから」

「人もケンタウロスも」

「気をるけましょう」

「うん、そうしないとね」

こうした話も為されるのだった。そうしてだ。

誰もが若い二人の幸せを祝い杯を空にし肉を平らげていく。とり  
わけ酒がよく飲まれた。葡萄酒の美酒は次々と口の中に入れられる。

その中でだ。人間の中年の男がだ。

不意にだ。こんなことをケンタウロスの若い者に言うのだった。

「飲め」

「飲んでるよ」

「いいから飲め」

「こうだ。そのケンタウロスに絡んで言うのだ。」

「俺の酒を飲め」

「だから今飲んでるから後で」

「今すぐ飲め」

後で飲むという彼にだ。男はさらに絡む。

「それとも俺の酒がっというのか？」

「だから待っててくれって」

「待てるか。今すぐ飲めよ」

「おい、そんなこと言っても」

ケンタウロスの若い男は困った顔になる。相手は赤ら顔で一言喋る度に酒臭い息を吐き出す。目は充血し完全にできあがっている。

その彼がだ。さらに言うのだ。

「お偉いケンタウロス様は人間風情の酒は飲めないのか」

「何でそんな話になるんだよ」

「そうだろ？あのイクシロンがヘラ様の姿の雲と交わってできたな」

「それを言うのか？」

「高貴な生まれだからな」

あからさまにだ。ケンタウロスという種族の出生のことを誹謗しだした。この出生のことはケンタウロス達にとってはタブーなのだ。

### 第三章

だがそれをあえて言っただ。男は絡むのだった。

「所詮土くれの人間の酒はまずいつてのか」

「おい、あんた」

出生のことを言われた。それまでは引いていた若いケンタウロスもだ。顔付きを険しくさせてそのうえで人間の男に対して言い返すのだった。

「それを言うか？」

「言っつて悪いか？」

「それだけは言うな」

その彼等にとつてのタブーをだというのだ。

「許さないぞ、絶対に」

「許さないつていつたらどうするんだ」

「外に出ろ」

場のだ。外にだというのだ。

「話をしよう。じつくりとな」

「おいおい、逃げるのか」

男は酔っていてだ。こうとらえてしまった。

「流石はへら様の御子だな」

「……まだ言うのか」

再び言われた。若いケンタウロスもだ。

切れた。そのうえで言葉だった。

「おい、じゃあ今すぐここでな」

「どうするんだ？」

「殺してやる」

剣を抜いた。それで男に返す。

「もう我慢できるか」

「何だ？やるつてのか？」

「ここまで言われて何もしないでいられるか」  
種族の出生のことを言われた。ケンタウロスが怒らない筈がなかった。何しろ不義、それもかなり間抜けな形のそれで生まれたからだ。

「死ぬ。一太刀で済ませてやる」

「じゃあ俺もだ」

男もだ。剣を抜いた。

「イクシロンの御子様と刃を交えるか」

「ああ、来い」

二人は今にも殺し合おうとする。しかしだ。

周りはその彼等を見てだ。すぐにだった。

「おい、止める」

「今はめでたい場だぞ」

「それで剣を抜いてどうするんだ」

「何考えてるんだ」

人間達もケンタウロス達もだ。二人を止めようとする。

「とにかく今はな」

「落ち着け」

「ほら、水でも飲んで」

「とにかくな」

「五月蠅いっ」

だが、だ。ここでだ。

酒に酔った人間の中年の男も若いケンタウロスも剣を振り回した。幸いそれで死んだ者はいない。だがそれでもなのだった。

## 第四章

人間側もケンタウロス側も傷を負った者が出た。それでだ。切られて傷つけられた面々がだ。切れたのだった。

「おい、やったな！」

「手前！折角止めに入ったのに！」

「なら容赦しないからな！」

「覚悟しろ！」

彼等もそれぞれ剣を出してだ。そのうえで。

暴れだした。二人が大勢になりさらに巻き込んでだ。式は滅茶苦茶になるうとしていた。

それを見てだ。新郎が己の背に新婦を庇いながら言うのだった。

「これはまずいな」

「え、ええ」

新婦も彼のその言葉に頷く。

「折角の婚礼の場なのに」

「一体どうしようか」

「このままだと。場が滅茶苦茶になるだけじゃなくて」

さらに悪くなるというのだ。

「人が死ぬわよ」

「今にもね」

何しろめいめいが剣を抜いているのだ。それではだった。

「どうしよう、困ったな」

「どうしたらいいのかしら」

二人は途方に暮れていた。騒ぎに参加していない人間やケンタウロス達もあまりにも酷い暴れ方なので止められない。皆おろおろとしていた。

だがここで、だった。

オルフェウスは豎琴を出した。それでだ。

奏で歌を歌いはじめた。すると。

これまで暴れていた人間もケンタウロス達もだ。急にだ。暴れるのを止めて静かになりだ。そうしてだった。

自然と戦いを終わらせていた。それを見てだ。

彼は満足した顔でだ。こう新郎と新婦に話した。

「収まりましたね」

「君の音楽でかい」

「はい。私は確かに剣も槍も使えません」

そして弓もだ。彼は武器は一切使えないのだ。

だがそれでもだと。彼は話すのである。

「しかしそれでもです」

「その歌と豎琴で」

「戦いを収められるのですね」

「音楽、芸術は」

それは何かというのだ。

「美です」

「そうだね。素晴らしい芸術はね」

「まさにそれですね」

「それはあらゆる方の心を魅了します」

だからだというのだ。

「この争いもです」

「収められたんだね」

「そうなのですね」

「その通りです。芸術、美は全てを魅了し」

そしてだった。まさに。

「無益な争いも収められます」

「馬鹿なことをした」

「全くだ」

実際にだ。これまで争っていた者達もだ。

気恥ずかしい顔になってだ。それぞれ言うのだった。

「酒に酔って。こんなことをして」

「場を乱してしまった」

「では皆さん」

だがオルフェウスはその彼等を咎めることなくだ。微笑みを向けてだ。

彼等にだ。こう話すのだった。

「また。楽しみましょう」

「この婚礼の場を」

「そうせよと」

「争いは終わりました。ですから」

だからだというのだ。

「あらためてそうしましょう」

「そうですか。それなら」

「もう一度」

人間達もケンタウロス達もお互いを見やりそのうえでだ。握手をして和解をした。これで再びだ。

仲良く婚礼の場を楽しむのだった。オルフェウスは豎琴を奏で歌を歌い宴を盛り上げた。これが彼がこの場でしたことであつた。

オルフェウスは確かに武器を持たない。だが彼は紛れもなく争いを収め人を助けられる英雄だった。英雄だからこそである。

彼はアルゴー号にも迎えられたのだった。英雄達を集めた冒険の船に。そしてそこでも豎琴と歌でだ。他の英雄達を魅了したのである。それがオルフェウスという英雄だった。

そこにある美 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0257z/>

---

そこにある美

2011年12月1日00時50分発行